

身体とイメージをめぐって： 「舞踊および芸能、儀礼のデジタル化—その可能性を探る」

(司会) 石井達朗

約550年前、ドイツのグーテンベルクによる活版印刷の発明が、その後の人類の歴史の情報活動に多大な貢献をする嚆矢となったのは周知の事実です。そのお蔭で知的交流が活性化され、知的遺産が蓄積され、わたしたちの研究も紙と印刷の発明と発展に依存してきました。それに輪をかけるように、娯楽あるいは芸術表現として20世紀に爛熟した写真と映画という映像メディアは、人々のコミュニケーション活動を飛躍的に増大しました。ところが、この歴史的な状況に大きな変化が起りつつあります。紙を媒体としていた情報資源がデジタル化され、コンピュータ、テレビ、電子ブック、携帯電話、その他のさまざまな電子媒体を通して提供されているということです。

デジタル化がわたしたちの生活のあり方、なによりもコミュニケーションのスタイルを変えてゆくことは、身近なパソコンや携帯電話を見てもわかることですが、その議論は識者・専門家によりさまざまに語られてきたことでもあり、今回の話題とするところではありません。わたしたちの「研究」という立場から見ると、想像する以上にデジタル化が研究のあり方を変容してゆく可能性があります。文字資料ばかりでなく、静止映像・動画映像・音楽資料をふくむ膨大な資料を、場所をとらずに情報資源として蓄積し、今まで考えられなかったほど迅速に、しかも不特定多数の人々に対して、情報を提供することを可能にするからです。

しかし、デジタル化するということは、たんに資料をコンピュータのなかにとりこみ、利用者がそれを引き出すという単純なことではなく、利用者が検索し理解し関連づけ考察できるような有機的な普遍性・社会性に基づいていなければなりません。ではどのような方法論とシステムをもって情報資源のデジタル化された構築を行なってゆくのか。これが専門家が考えるアーカイヴズ論であり、アーカイヴズ研究ということになるでしょう。

慶應義塾大学アートセンターの土方巽アーカイヴでは、舞踏の始祖である土方の資料が、画像・映像・文字・音声・(衣装、装置、楽器、絵画、彫刻などの)造形物、それに土方独自の「舞踏譜」と呼ばれるものなどを含む非常に複雑な集成をかたちづくっている点を考慮して、体系性ばかりでなく創造的・感性的な「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」(ジェネティックとは「生成」ということ)としての作業をしています。この心

臓部であるもっとも重要な部分を構築しているアートセンター訪問所員の内田まほろさんにはこの「デザイン理論」について語っていただきます。

一方、慶應義塾大学教授の野村伸一さんは、この方面の技術の専門家ではありませんが、日本・中国・韓国・台湾・インド・インドネシアなどの芸能、祭祀、シャーマニズムなどのフィールドワークの成果をどのようにしてデジタル化するかという大掛かりなプロジェクトを、彼が中心となり推し進めてきた実績があります。野村さんにはこのプロジェクトの孕むさまざまな問題点そしてメリットについて、実際にデジタル化された資料を見ながらお話していただきます。

すでに動きの分析などの研究があり、舞踊画像の三次元的な記録と保存が行なわれ、また振付けや舞踊教育を目的としてコンピュータが用いられつつあります。別にデジタル化を手放しで礼賛するわけではなく、アナログ的なアプローチの効用を充分ふまえたうえで、デジタル化が舞踊研究にどんな可能性をもたらしうるかを、幅広い見地から探ってみたいと思います。内田さん、野村さんおふたりの話がそのためのヒントになればと考える次第です。